

2025.11.2.

「聖なる民とされて」

旧約 申命記 26章16～19節

新約 ヨハネによる福音書 5章41～47節

1. はじめに

今朝は先に天に召された方々を覚えて礼拝を捧げています。ここにお集まりの方は、それぞれが親しい交わりの中にあった先に天に召された愛する方を思い起こされていることと思います。それは家族であったり、友人であったり、信仰の友、信仰の先達だったりするでしょう。私も自分の母や父、葬式をした100名を超える人たち、そして私に洗礼を受けた牧師のことなどを思い起こします。私の父は、76歳で肺がんで天に召されました。私が40歳の時でした。あれから29年。私も父が亡くなった年まであと何年と数える年になってきました。父は最後の1年は舞鶴で抗がん剤治療をし、飛行機で栃木県の家に戻ることを繰り返しました。父は洗礼を受けることなく、召されました。しかし、私が牧師として生きていることをとても喜んでくれていました。そして、父の最後の1年間に関わった舞鶴の主治医の一家、そして食欲が衰えていく父のために「これなら食べられるのでは」と毎日美味しいものを作って届けてくれた板前さんが洗礼を受けました。父は不思議なように神様に用いられました。父がいなければ私もいないわけで、父は神様のご計画の中で生かされたのだと思っています。母は9年前に95歳で富山で天に召されました。6年間、富山鹿島町教会の牧師館で一緒に暮らしました。牧師の家で生活するようになりまして、母は毎週礼拝に出席し、90歳の時に洗礼を受けました。同居を始めたとき、既に認知症の症状は出ていました。しかし、食事のたびごとに妻が祈る祈りに合わせて「アーメン」と唱えていました。私が葬式をしました。私は3男1女の4番目の末っ子ですが、両親の最後の時を共に過ごすことができました。ありがたいことでした。

私に洗礼を授けてくれた牧師が70歳で引退されることになったとき、私が献身しました。その牧師はとても喜んでくれました。「自分が洗礼を授けた人の中で献身した人が一人も出なかった。自分の伝道・牧会は間違っていたのではないかと、どこかで思っていた。しかし、間違っていなかった。神様が祝福してくれた。」そう言って喜んでくれました。

そのような人たちがいて、現在の私共がいるわけです。今朝、皆様も先に天に召された愛する方々を思い起こして、ここに集われていることでしょう。それぞれに与えられたかけがえのない出会いと思い出を心に抱いておられ事と思います。それらの方々のことを思い起こすとき、私どもは「自分もやがて召される時が来る」ということをも思います。そのような私どもに、今朝与えられているみ言葉は、イエス様の言葉です。

2. 文脈の中で

今朝の御言葉は、一読して、すぐになるほどと分かるような個所ではありません。順番に御言葉を受けていく中で、今日はたまたまこの箇所になったわけですが、文脈を抑えれば、それほどややこしいことをイエス様はお語りになっているわけではありません。5章の始めの所で、イエス様はベトサダの池のところで、38年間も病気であった人を「**起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。**」(8節)という言葉をもって癒やされました。この言葉によって癒やされたこの人は、すぐに立って、床を担いで歩き始めました。こんなことはあり得ないことです。しかし、イエス様は神の御子でありましたので、このようなことがお出来になったわけです。この日は祭りの日で、エルサレムには大勢の人が巡礼に来ていました。そして、彼は「床を担いでいる」ということを咎められます。その日は安息日だったからです。十戒の第4の戒めに「安息日を心に留め、これを聖別せよ」とありますが、これに違反している。とんでもないことだ。そのように考える人が、ユダヤ人の中に大勢いました。咎められたこの男の人は、なんで咎められるのかピンとこなかったでしょう。彼は自分を癒やしてくれた方が「**起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。**」と言われたので、その通りにしただけだったからです。そして、この人を癒やしたのがイエス様だということが分かりますと、ユダヤ人達はイエス様を咎め始めます。「安息日に癒やしを行うなんてとんでもない。律法違反だ。何ということをしたのか。」そう、イエス様を激しく非難しました。彼らは十戒に代表される律法を守ることによって救われる、だから律法をしっかり落ち度なく守るのが神の民のあるべき姿だ、これこそ神様の御心に適うことだ、そう考えていました。ですから、イエス様を咎めたわけです。しかし、イエス様は「そうではない。あなた方は神様の御心を知らない。私は神の子として、御心に適ったことをした。」と語ります。そうして、イエス様とユダヤ人との厳しい対立と論争が始まりました。この対立がやがてはユダヤ人達がイエス様を十字架につけることに繋がっていくわけです。今朝与えられている御言葉は、その対立・論争の中でイエス様がお方利になられた言葉です。

3. 人の誉れか、神の誉れか

そのような流れの中で、イエス様は「**わたしは、人からの誉れは受けない**」(41節)と告げます。つまり、人から称賛されたり、素晴らしいと言われたり、そんなことは私は全く求めている。私にとって、そんなことは少しも大切なことではない、そう言われたわけです。これは、ユダヤ人達が律法を守って「自分は正しい人だ、神様の御心に適う歩みをしている」と思っているが、本当のところは自分がしていることを人に見られて、「あの人は大した者だ、信仰深い人だ、立派な人だ。」と言われたいだけではないのか。つまり、あなたたちは人からの誉れを求めているだけではないのか。そう揶揄したのでしょう。イエス様が大切にしたのは「人からの誉れ」ではなく、「神様から

の誉れ」でした。

このように御言葉に出会いますと、自分は「人からなんと思われても良い」とまでは中々思えないと感じる人もいるでしょう。私もそうです。日本に生きている以上、「同調圧力」と言いますか、周りの人と同じようにしていないといけなような空気が、いつもあります。他の人と違うことを言ったり、行ったりすることには、どっかはばかりとあります。しかし、イエス様はここで、全く周り人の目を気にしないことが良いことだと言っているわけではありません。そうではなくて、本当に大切なことは、人にどう見られるかではなくて、神様にどう見られるかだ。だから、神様の目から見て良いことならば、人の目を気にしないでちゃんとやりなさいと言われた。そういう時には、人の目を気にしないで良いのです。逆に言いますと、いつでも、何でもかんでも、人の目を気にしないということではないのでしょう。大切なことは、神様の御前に生きていることを忘れてはならないということです。

この「誉れ」と訳されている言葉は「栄光」とも訳される言葉です。イエス様はここで「人からの栄光を受けない」、求めない、要らない、と言われました。では何を求めるのかと言えば、直接その様に言われたわけではありませんけれど、私は「神様からの栄光」を求めると告げられたわけです。この「イエス様が神様からの栄光を受ける」ということは、ヨハネによる福音書においてはただ一つのことだけを意味しています。それは、十字架です。イエス様は十字架に架けられたとき、神様の栄光をお受けになりました。十字架は、どう見ても栄光の姿ではありません。人の目には、イエス様が十字架に架けられて死ぬ様は、まことに惨めで、無惨で、悲惨なものでしかありません。目を背けたくなるような出来事です。しかし、この十字架こそが、イエス様が神の子としての栄光を受けた時であり、神様から見れば完全に御心に適った神の御子の姿でした。ということは、イエス様はこの時、既にご自分の十字架を見ておられたという事なのではないのでしょうか。そして、神の栄光を受けるということは、十字架に至るまで御心に従うということなのであって、律法を守っているから自分は正しいものだというような所に胡座をかいていられるようなものではない。もっと激しく、厳しものだ。そうイエス様は言われたのでしょう。

4. 愛がない

先ほど、安息日にイエス様が 38 年間病を患っていた人を癒やされたのが、事の発端であったと申しました。イエス様は、この人を癒やすこと、38 年間の病の苦しみから解き放ってやること、それが神様の御心に適うこと、神様の憐れみ、神様の愛を現すことであり、神の御子としての為すべきことだと確信して癒やしました。しかし、ユダヤ人達は「安息日に癒やすとは何事か」と怒ったわけです。ユダヤ人達は安息日に何もしないことが御心に適っていると信じておりました。十戒に従っているのだから、疑問の余地はないと思っておりました。そして、「律法を破っている」と言ってイエス様を断罪しました。しかし、イエス様は「神様は今日も働いておられるのだから、私

も働く。」と告げました。皆さんはどちらが御心に適っているか、はっきり分かるでしょう。私はこう思っています。人間は「正しい、正しくない」という尺度だけで生きようとしますと、心が動かなくなってしまうのではないか。38 年も病に苦しんでいた人が癒やされた。その人の身になれば、「本当に良かったね」そう思うのが当たり前ではないでしょうか。その当たり前の心の動きを止めたもの。それが彼らの心の中に深く根を張った「律法を守る正しさ」でした。しかし、それは「自分の正しさ」ではないかとイエス様は言われるのです。それは神様が良しとされる正しさなのかと問われるのです。勿論、正しいことは大切です。しかし、正しさというものは、それを振り回せば、必ず傷つく人がいます。正しさの剣というものは、愛の鞘に納めて、自分の腰に差していれば良い。決して振り回すものではない。私はそう思っています。そもそも、正義の剣は多くの場合「自分の正義」であり、人は互いにその自分の正義を振りかざして争っているのではないのでしょうか。そこには愛がありません。神様の正義は愛と結びついています。愛のない神様の正義などありません。

イエス様は「**あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。**」(5:42) と告げられたのはそういうことです。神様を信じるとは、神様を愛するということ。そして、神様を愛する者は、神様の誉れを求める。イエス様は、あなた方が気にしているのは人の誉れであって、神様からの誉れではない。だから、神様が愛してやまない 38 年間病で苦しんでいた者が癒やされても、少しも心を動かすことがなかった。神様の愛とあなたたちは離れていた。それはあなたたちが神様を本当のところは愛していないからだ。そう告げられたわけです。神様を愛する者は神様の愛を受けて、神様が愛する者を愛することになるからです。

5. モーセが記した律法によると

では、なぜユダヤ人達は律法を守ることによって救われると考え、律法を守ることこそ正しいことだと考えるようになったのでしょうか。それはモーセによって与えられた十戒に代表される律法にこのようにしなさいと記されているからです。聖書にそう記されているのだから、それが正しいに決まっている。その通りです。しかも、当時のユダヤ人達は聖書に記されていることだけでは十分ではないと考え、それをより徹底するために、具体的にいちいちこういう場合にはこうすると決めていきました。十戒の第 4 の戒め「安息日を心に留め、これを聖別せよ」を守るために、ユダヤ人達は安息日には 39 に及ぶ行ってはならない仕事を決め、更にそれは幾つにも細分されて、安息日してはならないことを決めておりました。そして、それを守ることによって、自分たちは神様の御前に正しい者とされ、救われる。そう考えていたわけです。しかし、本当にそうなのでしょうか。聖書は本当にそう告げているのでしょうか。

十戒は出エジプト記 20 章に記されておりますけれど、この時イスラエルの民は既にモーセによって率いられ、エジプトを脱出しておりました。この時までには、様々な奇跡が神様によって為され、

イスラエルは神様に守られて来ました。割れました海が二つに割れて道が出来て、イスラエルがその道を通って逃げ、イスラエルを追ってきたエジプト軍は元に戻る海の水に溺れて助けられるという出来事もありました。つまり、イスラエルに律法が与えられたのは、イスラエルがエジプトを脱出した後、神様に救われた後です。神様の救いの恵みが先にあって、その恵みに応える道として神様が律法を与えられたわけです。順番が逆です。神様の救いの恵みが先にある。律法はその後です。まず、救いが先にある。イスラエルが救われたのは、正しくて、立派な民であったからではありません。ちっとも良いところなんてなかった。しかし、神様はイスラエルの先祖アブラハムと「あなたの子孫を大いなる国民にする。」という約束した。そのイスラエルの民がエジプトの奴隷となり、嘆き、叫び、その声が神様に届いた。そこで神様はモーセという人を選び、リーダーとして立て、エジプトから救い出し、アブラハムに与えると約束したカナンの地に導くことにされたわけです。そうして神様はイスラエルをエジプトから救い出され、その旅の途中、シナイ山でイスラエルに律法を与えました。それが十戒です。ですから、律法を守って、正しい人になって救われるというのは全く順番が逆なのです。イスラエルが救われたのは、ただ神様の恵みによって、憐れみによって、愛によってです。この神様との愛の交わりに生きる為に与えられたのが十戒であり、律法なんです。ですから、十戒の心、律法の心、律法を与えられた神様の御心とは、恵みであり、憐れみであり、愛なのです。律法をという正しさを振り回して、人を断罪するなど、何と律法の心から離れていることでしょう。イエス様は、モーセによって与えられた律法の心、神様の御心をお示しになった。イエス様はご自身の業、この場合は38年もの間病を患っていた人を安息日にもかかわらず癒やす、ここにこそ神様の御心がある。そうお示しになられたわけです。そして、それは十字架によって決定的に示されるものでした。ただ神様の憐れみによって、神様の愛によって、一切の罪を赦され、神の子・神の僕としていただき、永遠の命を与えていただいた。神様はただあわれみによってイスラエルを選びご自分の「宝の民」「聖なる民」としてくださったのです。

6. 先達の示した道：キリストに倣いて

私共が今朝覚えている先に天に召された方々は、この神様の憐れみの御手の中で生かされ、地上の生涯を歩みきり、天に召されていきました。その方々の中には、洗礼を受けることなく、キリスト者になることなく、地上の生涯を閉じた方もおられるでしょう。私の父もそうでした。しかし、それらの人たちが神様の愛の御手の中にいなかったとか、神様の永遠の救いのご計画の外にあるとか、救われることはないとは誰も言えないでしょう。それは、神様がお決めになることです。その神様の決定は、御子を与えるほどの憐れみによって下されるものです。そして、その憐れみは御子を与えるほどのものであり、私共を救うほどのものです。ですから、ただその神様の憐れみを信頼し、これに期待することは私共に許されているのではないのでしょうか。

そして、キリスト者として私共の前を走っておられた方々を思い起こしますとき、私共は彼らが

確かに「人からの誉れ」ではなく、「神からの誉れ」を求めて走り通したことを知るのです。それは、彼らがやがて自分が召されていく御国における命、永遠の命・復活の命を求めて、この地上の生涯を歩み通されたということです。勿論、この地上にあって、多大な社会的貢献をされた方もおりましょう。人々に感謝をされ、或いは勲章をもらった人もいるかもしれません。しかし、それは彼らは何よりも願い求めていた誉れ、栄光ではありませんでした。彼らは何よりも願い求めていた誉れ、栄光は、神様によって与えられる誉れであり、栄光でした。それは神様の子とされ、イエス様と一つの命に与り、御国において完成する永遠の命でした。

また、その地上の歩みにおいて何よりも大切にしていたのは、神様を愛し、神様を信頼し、神様にお従いすることでした。この神様を愛することと、隣り人を愛することとは決して分けることが出来ません。あの人は信仰は確かなのだけれど、愛がない。そんな人はいません。神様を愛する者は神様の愛を注がれ、その愛をもって隣り人を愛する者となります。勿論、私共は罪人であり、欠け多き者ですから、イエス様のような愛に満ちた人なんて一人もいません。特に、近しい人に対して、私共の罪や欠けは覆いようがなく現れてしまうものです。私も妻や娘に対して、最も多くの罪を犯していると思っています。そこには甘えがあるからなんですね。しかし、たとえそうであったとしても、それでも私共は神様に愛されていることを知って、初めて愛することを知りました。そして、その愛に生きる者へと変えられてきました。先に召された方々も、神様の愛の御手の中に生かされ、愛する者として変えられ続けました。その愛の中で与えられた交わりを私共は思い起こします。そして、その愛は御国において完成することを知っています。私共が御国において、近しい人、愛する人と再び相見えるとき、そこには全き愛があることでしょう。そのことを覚えて、共に祈りを合わせたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

私共は今朝、あなた様の御許に召された愛する者たちを覚えて礼拝を守っております。あなた様が地上での命を与えてくださり、私共との出会いを与えてくださり、愛の交わりを与えてくださいましたことを心より感謝いたします。私共の地上での命も、やがて閉じられるときが来ます。しかし、それで全てが終わるわけではありません。イエス様と一つに結び合わされた私共は、肉体の死を超えて、あなた様との永遠の交わりに生き続けます。そして、時が満ちたならば、イエス様が再び来られて、私共も先に召された者たちも共に復活し、あなた様の御前に立って、御名を誉め称えることでしょう。その日を待ち望みつつ、この地上における生涯が閉じられるまで、あなた様の子・僕として、互いに愛し合い、仕え愛、支え合い、あなた様の御心に適った歩みを為していくことが出来ますよう、心から祈ります。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン